

2017  
おもろ  
チャレンジ

## タンザニアの農村でフェアトレード調査

農学部 2年

柴田 星斗

タンザニア

2017年10月19日-

2017年11月21日



### 渡航概要と内容

#### ・スケジュールの概要

- 10月18日 日本出国
- 10月19日 タンザニア到着
- 10月21～26日 キンゴルウィラ村
- 10月28日～11月3日 ルカニ村
- 11月6～11日 キリマンジャロ山
- 11月12～14日 アルーシャ
- 11月15～19日 ムワンザ
- 11月21日 タンザニア出国
- 11月22日 日本到着

#### ・内容

キンゴルウィラ村とルカニ村においては村の人の家にホームステイし、村での生活を体験するとともに、農作業、聞き取り調査、近隣のマーケット、学校、病院の訪問などを行った。また、特にルカニ村においては、コーヒーのフェアトレードプロジェクトが行われているため、関係者や農業協同組合に話を聞いた。コーヒーのフェアトレードの生産現場における現状や影響を明らかにする、という目的のもと調査した。聞き取りした内容に関しては、文献資



キンゴルウィラ村



ルカニ村

料を踏まえながら、とりまとめる予定である。また、その他の都市に滞在している時は、マーケットに行って、販売されている農産物の種類を調べ、各都市で比較した。さらに、KIDT (Kilimanjaro Industrial Development Trust) や Lower Moshi の灌漑設備の見学なども行った。他にも、都市部と農村部での水質の違いを調べるために、水質調査を行った。具体的な調査項目は、pH、電気伝導度、鉄、全硬度、残留塩素、硝酸、リン酸、亜硝酸、アンモニア、COD などである。検査結果に関しては、エクセルファイルにまとめ、分析した。



キンゴルウィラ村での農作業の様子

・渡航中に日本との文化の違い等から苦労したこと

タンザニアでは主食として、チャパティ（小麦粉でできた平たいパンのようなもの）、ウガリ（トウモロコシ等の粉を湯で練ったもの）、バナナ、ワリ（ご飯）などを食べた。他には、牛肉や野菜類などを食べた。食事は食べられるのだが、自分が美味しいと感じるものはあまり多くはなく、食事を摂る量がかなり減ってしまった。慣れない環境下での生活に加え、食事量の減少により、しばしば疲労を感じた。その結果、渡航前と比較すると、渡航後の体重が3kgほど減少した。

日本にあるような綺麗なトイレはタンザニアにはほとんど見られず、トイレに行くことを苦痛に感じた時もあった。しかし、意外にも水洗のトイレが多く、そこまで苦労はしなかった。

ホテル以外でお湯が出るシャワーはなかった。暑い時に水シャワーを浴びるのであれば、さほど問題はないものの、標高が高く寒い所では、シャワーを浴びるのに苦労した。また、水不足だったキンゴルウィラ村では、バケツに入れた濁り水でシャワーを浴びていたのも、非常にストレスを感じた。

物を購入する際は、値札が付いていないことが多く、値段を聞く必要があった。もしくは、値段交渉をして購入する。他にも、ピキピキ（オートバイタクシー）、バジャジ（三輪自動車タクシー）、ダラダラ（小型バス）、タクシーなども乗る前に値段交渉が必要であり、苦労もしたが、値段交渉も一種のコミュニケーションであり、楽しかった。地元のタンザニア人にとっては、相場が明らかなのかもしれないが、外国人の私は相場を知るのに苦労した。



キンゴルウィラ村で水汲みをする子供達

#### ・渡航中に起こったトラブルとその対処方法

都市部では、犯罪に遭う可能性が高いと考えていたため、自分の身、荷物ともに最大限の注意を払っていた。例えば、高価な物は持ち歩かない、服の中に貴重品を隠す、鞆に鍵をかける、などを対策として行っていた。しかし、農村滞在中は犯罪には遭わないだろうと甘く考えてしまい、少し警戒が緩んでしまった。そして、部屋においた鞆に鍵をかけ忘れて外出したことが何度かあった。その結果、財布から日本円にして約2万円が抜き取られるということが起こった。これは、日本に帰国後に発覚したため、残念ながら対処はできなかった。私は、現金やカードを3つの財布に分散させ保管するというようにしてお金の管理を行い、1つが盗られたとしても、滞在を継続し、無事に帰国できるようにしていた。

タンザニア人にとっては、アジア人の私は、大変なお金持ちであり、大人、子供、知り合い、見知らぬ人など問わず、多くの人から金銭を要求された。1つ目のケースとしては、自分が何かサービスを受ける時（例えば、商品の購入やタクシーなど）、相場より高い金額を要求されるというものである。しかし、これはあまり多くはなかった。また、自分が相場を把握しておけば、相手に対して、強気で交渉でき、相場より若干高い金額を支払えば、相手も納得して受け取ってくれた。2つ目のケースは、自分が街中を歩いていると、いきなり話しかられ、街中の案内、コミュニケーション、物品の販売などを通して、金銭を要求するというものである。これに関しては、話しかけてきた相手と目を合わせず、完全に無視をすれば、諦めることが多い。しかし、観光客の多い都市のモシでは、この手が通用しないこともあり、隣で延々と売り込みをかけられ、辟易することがあった。しかし、話しかけてくる方も、お金が欲しいため、与えてくれるサービスなどは有用なことがある。そのため、私は、マーケットの案内、市内の案内、バスの利用方法や料金に関する情報提供、などを受け、少額のチップを支払ったことは何度かあった。しかし、相手が信用できるかはわからないため、場所、時間帯などの見極めは慎重に行った。3つ目のケースとしては、タンザニア人と日常会話をする中で、金銭的な



ルカニ村のコーヒー栽培



コーヒーの果肉除去作業



モロゴロのマーケット

援助を求められる場合だ。例えば、日本に行きたいのだが、お金が足りないから援助してもらえないか、と言われたことが何度かあった。このような場合は、自分は学生で、奨学金を得て渡航している身なので、あなたに援助できるお金はない、と言って切り抜けた。仲良くなったと思っても、相手にとっては自分は金づるに過ぎないのかと感じられて少し悲しかった。しかし、これは日本とタンザニアの物価の違いを考えれば、当然のこととも言えるだろう。

## 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

### ・物価の違いや貧困について

タンザニア人にとっては、私は金持ちなので、援助してほしい、物を買ってほしいなどという人が少なからずいて、中にはしつこい人もいたので、煩わしかった。しかし、一方で、たまに現れる外国人にすぎりたいほど、貧困が深刻であるかもしれないとも思い至った。ダラダラと呼ばれる小型バスの運転手の1か月の給料は約100,000タンザニアシリングだと聞いた。2017年12月現在のレートで日本円にすると約5000円である。タンザニアと日本ではもちろん物価が違うので、一概には言えないが、十分な現金収入を得ているとは言えないのではないかと。物価の違いの参考までに、お湯シャワー、朝食付きの中級ホテルが1泊1500円程度であり、ゲストハウスなどは1泊500円程度であった。

### ・仕事不足について

タンザニアでは、仕事が見つらず、若者が仕事を見つけられない、という話をよく聞いた。最近では大学進学率が高まっているので、たとえ大学を卒業したとしても、仕事を見つけるのは難しいとのことだった。農村から都市部へ行っても仕事が見つからず、農村に帰ってきて農業を始める若者が出てきたそうだ。Kingolwira Secondary Schoolの校長に話を聞いた時に、試験に落ちてhigh schoolに進学できない約半数の生徒はどうするのか、と質問した。すると、secondary schoolを卒業しても仕事は容易には見つからず、家にそのままいる人が多いとのことだった。実際、Kingolwira Villageに滞在した時に村を案内してくれた、SadickiとAdaは20代であるが、2人とも仕事がなく、家で手伝いをしていると話していた。Adaは大学を卒業しているが、仕事がないと言っていた。

### ・言語について

タンザニアでは公用語が英語、国語がスワヒリ語である。英語が通じる所もあるものの、人々が会話するときにはほとんどスワヒリ語である。英語は学校教育や観光客相手の商売などに限られる。私は、スワヒリ語をほとんど勉強せずに渡航してしまったため、意思疎通に苦労することが多かった。やはり、相手を理解するためには、その人が話す言葉で会話することが重要だ、ということを感じた。一方で、英語を介することで日本人である自分とタンザニア人が意思疎通できるというのは面白いことであり、英語を勉強してきてよかったと感じた。しかし、お互いネイティブではないので意思疎通に苦労したり、自分の英語力不足を感じたりと課題は多かった。

・周りの人の助けについて

今回の渡航では、先生方、大学院生、過去にタンザニアに渡航したことがある人、タンザニアに滞在中の人など、多くの人に助けていただいた。例えば、渡航計画の相談、器具の貸し出し、情報提供などである。もちろん、鼎会からも金銭的な援助をいただいた。自分を助けてくれる人がいるのは大変心強く、今回の渡航は様々な人々の厚意なしには実現し得なかったもので、本当に感謝している。

## ■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

私は、JICA、青年海外協力隊など国際協力関係の活動に興味がある。そして、自分にとって未知の世界のアフリカに飛び込んでみたい、自分が将来関わるかもしれない発展途上国の農村部を見てみたい、という思いの下、今回渡航した。農村での約1週間のホームステイを2回行い、農村での暮らしを経験する中で、様々なことを感じ、違いも感じた。タンザニアの農村生活は日本での生活とあまりにも違うため、つらいことも多く、このような環境で自分はやっていけるのだろうか、と少し自信を失ってしまった。また、タンザニア人にとって異質な自分という立場を苦痛に感じるがあったので、このような状況で信頼関係を構築し、自分ができることを見つけるのは、容易ではないと感じた。以上のように思えたことが今回の大きな成長であると思う。現場を見てきたことでより具体的なイメージが湧いたので、今回の渡航経験を生かし、今後自分がどのような関わるができるのか、自分に何ができるのか、などを考えたい。また、今後も国内外において農業や農村を見る機会はあるので、その際に、今回見たタンザニアの農業や農村での経験を踏まえて、より俯瞰的に捉えられるようになりたい。

## ■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

私がこのプログラムに応募しようと思った時は、具体的なイメージは全くできておらず、渡航先も決まっていなかった。その時はただ単純に、アフリカに行ってみたい、発展途上国の農村部を見てみたい、お金が欲しい、などと思っていただけだった。しかし、志望動機書を書く段階で、色々調べて計画を具体化していき、さらに先生方にも相談して、より内容を深めていった。具体的に決まっていらないから応募しないというのではなく、とりあえず応募してみる、というので十分だと思う。書類を書く段階で、自分の考えが文章として整理されるので、採択されなくても応募する価値はあると思う。また、その際、周りの人の力を大いに借りると良いだろう。志望動機書を先生や過去の採択者に見てもらおう、過去の採択者の書類を見せてもらおうなどだ。利用できるものは何でも利用するという心構えが必要だと思う。

## ■ 主な奨学金の使途

\*渡航費・ビザ

\*宿泊費・滞在費

\*海外旅行保険・予防接種

\*交通費

\*食費

\*雑費 など